

球都桐生のトピックス

球都桐生の野球史年表(抜粋)【大会の情報は関東大会以上、●は甲子園出場校、■は日本一監督】

明治44年頃	青年実業野球団「興風会 ^{※1} 」結成
大正 8年頃	「桐生機関庫エンジンチーム ^{※2} 」結成
〃 10年	桐生中野球部創部（大正11年に稲川東一郎氏 ^{※3} が主将となる）
〃 13年	稲川東一郎氏が桐生中野球部の指導を開始する（コーチとなる）
昭和 2年	桐生中（現桐生高校）が夏の甲子園大会に初出場 ●甲子園出場1校目
〃 〃	桐生市体育協会設立（初代会長 堀 祐平氏）
〃 3年	新川球場完成
〃 8年	桐生中が春の選抜大会に初出場（稲川東一郎氏、正式に監督となる）
〃 11年	桐生中が春の選抜大会で準優勝
〃 〃	桐生中が夏の甲子園大会でベスト4
〃 〃	桐生工（現桐生工業高校）野球部創部
〃 20年	戦後の日本における初めての社会人野球チーム「全桐生 ^{※4} 」結成
〃 〃	11/24に新川球場 ^{※5} でプロ野球東西対抗戦開催（現プロ野球オールスターの前身） 翌日の11/25に、プロ野球東軍と全桐生が対戦し、延長12回の末、8対7で全桐生が勝利する
〃 21年	全桐生は、第1回全国都市対抗野球大会に出場し、準優勝
〃 〃	桐生工が選抜甲子園大会に初出場 ●甲子園出場2校目
〃 23年	桐生中が春の選抜大会でベスト4
〃 28年	桐生商業高校野球部創部
〃 29年	桐生高校稲川監督が桐生市本町に敬道館(後に修道館)野球道場 ^{※6} を創設
〃 30年	桐生高校が春の選抜大会で準優勝
〃 37年	桐生高校稲川監督が桐生市浜松町内に2代目の野球道場が完成
〃 44年	桐生球場完成
〃 46年	樹徳高校野球部創部
〃 47年	日本楽器（ヤマハ）が都市対抗野球大会で優勝 ■日本一監督①：川島勝司（桐生高校出身）※S63年、H2年も優勝、H8年アトランタオリンピックでは日本代表監督を務め、銀メダル獲得
〃 53年	桐生高校が春の選抜大会でベスト4
〃 55年	桐生西高校野球部創部
〃 58年	東芝が都市対抗野球大会で優勝 ■日本一監督②：前野和博（桐生市出身）
〃 59年	北子供会コンドルスが関東大会で3位
〃 60年	桐丘高校野球部創部（現桐生第一高校）

〃 〃	桐生OBが第1回全日本還暦野球大会で優勝 ■日本一監督③：山田 崑（桐生市出身）
〃 61年	境野中が関東大会でベスト4
〃 〃	広沢子供会が関東大会で3位
〃 62年	新川球場は老朽化により解体、新川公園として再整備
平成 2年	広沢中が関東大会で優勝、全国大会でベスト8
〃 3年	桐生第一高校が春の選抜大会に初出場 ●甲子園出場3校目
〃 〃	樹徳高校が夏の甲子園大会に初出場 ●甲子園出場4校目
〃 4年	樹徳高校が夏の甲子園大会に2年連続出場
〃 5年	桐生第一高校が夏の甲子園大会に初出場
〃 〃	青山学院大学が全日本大学選手権大会において優勝 ■日本一監督④：河原井正雄（桐生市出身）※H8、11、17年も優勝
〃 8年	相生小野球クラブが全日本学童軟式野球大会で準優勝
〃 11年	桐生第一高校が夏の甲子園大会に出場し、優勝 ■日本一監督⑤：福田治男（桐生市出身）
〃 14年	桐生商業高校が夏の甲子園大会に初出場 ●甲子園出場5校目
〃 15年	桐生第一高校が夏の甲子園大会でベスト4
〃 20年	西武ライオンズが日本シリーズ制覇 ■日本一監督⑥：渡辺久信（桐生市出身）※同年アジアシリーズも制覇
〃 26年	桐生第一高校が春の選抜大会でベスト8
〃 〃	桐生球場ナイター照明工事（H26）、耐震改修（H28）
〃 27年	広沢子供会野球部がガスワンカップ関東大会で優勝
〃 28年	菱境野子ども会野球部がガスワンカップ関東大会で3位
〃 30年	桐生ボーイズが全日本中学野球選手権大会（硬式）で3位
令和 2年	桐生第一高校が交流試合（夏の甲子園大会代替）に出場

※1 青年実業野球団「興風会」

明治44年頃に発行されていた「武俠世界談」に関東地方に初めて青年実業野球団、興風会誕生（魚屋アリ、八百屋アリ、呉服屋アリ、織物製造業アリ）」と掲載がある。詳細は不明であるが、桐生市内の野球チーム。



※2 桐生機関庫エンジンチーム

大正元年12月に足尾線が開通したが、客車と貨車の混合列車を運転する機関士、機関助手、整備士により結成されたチーム。桐生中と練習試合をよく行っており、桐生機関庫エンジンチームが国鉄宇都宮運輸事務所管内の代表として、東京に試合に行く際、桐生中の稲川東一郎氏もコーチとして帯同していた。

エンジンチームの由来は、機関士は英語でエンジンドライバーとなることからエンジンチームとしたもの。



エンジンチーム 対 桐生中

※3 稲川東一郎（桐生中、桐生高校、全桐生監督）

明治38年に福島県で生まれ、大正4年に桐生市へ転入し、南尋常小学校を卒業後、桐生中へ入学。大正9年の桐生中3年時に野球に巡り合い、好奇心旺盛な稲川氏は、大正10年の4年時に野球部を創設し、練習を開始する。大正11年の5年時は主将となり、憧れの甲子園を目指すも出場することが叶わずに卒業する。

卒業後は、一旦東京で就職するも野球のことがどうしても忘れられず、1年あまりで帰郷し、家業に従事しつつ、母校である桐生中野球部の指導に当たる。稲川氏の指導により、強くなってきた桐生中は、昭和2年の夏の甲子園大会に初出場する。

昭和8年に監督として正式に就任、熱心な指導と独創的な采配で桐生中を全国級のチームに押し上げた。当時の新聞紙上でも「独創的な情熱の野球」と題され、近年では、野村克也氏の代名詞であった「ID野球」を、当時から行っていたとされている。綿密なデータ収集のもと「これが稲川野球」と言わしめ、知将の名を確固たるものとした。

以後、昭和42年の春季大会の試合中に倒れ、61歳で永眠されるまで、夏13回、選抜11回の出場を果たし両大会合わせ、ベスト4が2回、準優勝が2回の快挙を成し遂げた。

また、終戦直後、桐生中の監督として指揮を執っていた稲川監督の元に、桐生中や桐生工（現桐生工業高校）の野球部OBの精鋭が多数集まり、稲川監督に全桐生の監督をお願いし、全桐生を結成。（全桐生の詳細については※4）

時は過ぎ、稲川監督没後、33年後の平成11年夏、桐生第一高等学校が見事全国制覇を成し遂げ、「球都桐生」に新たな歴史を創りはじめる。



※4 全桐生

終戦直後、復興の意欲すら起こらず途方に暮れていた時に、軍隊や海外から復員してきた桐生中や桐生工出身OBらが稲川監督の元で、いち早く練習が始まり、戦後の日本における初めての社会人野球チーム「全桐生」が結成される。

昭和20年11月24日に新川球場でプロ野球の東西対抗戦が開催され、その翌日の11月25日に新川球場にて、プロ野球東軍と全桐生が対戦し、延長12回の末、8対7で全桐生がサヨナラ勝利し、観衆は熱狂して全桐生の健闘を称賛した。

昭和21年の夏、全桐生は、戦後初開催となる第1回全国都市対抗野球大会に出場。3試合とも延長戦の逆転勝利で決勝へ。岐阜県大日本土木との決勝戦は健闘むなしく1対3で敗れ準優勝であったが、終戦直後の荒廃した世相の中で「全桐生」の活躍は、沈みがちだった市民に明るい話題と活力を強く与えてくれた。

その後、国民的スポーツとして急速に人気が出てきたプロ野球界へ全桐生から多数の主力選手が入団したことや、チームの運営上の経済的な問題もあり、まもなく休部、そして解散となった。



昭和21年頃 新川球場にて撮影



昭和21年8月 全国都市対抗野球大会決勝
全桐生 対 大日本土木(開催地:後樂園球場)

※5 新川球場

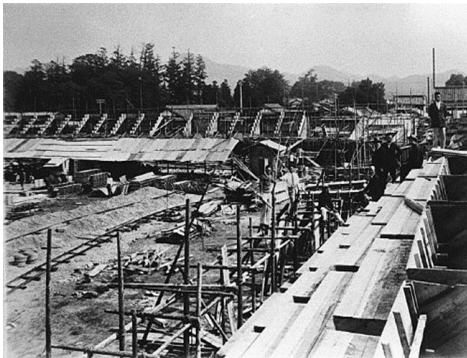
昭和2年、第13回中等学校優勝野球大会に桐生中が出場した事を記念して、市内で織物業を営んでいた堀 祐平氏（桐生市体育協会初代会長）を中心に各種団体、大勢の市民にも呼び掛け、自らも私財を投じて北関東随一の球場を建設。

昭和3年11月3日に竣工式を行い、11月4日には落成記念として、当時から人気の高かった東京六大学野球の早稲田対法政大学の新人チームによる試合が行われ、多数の市民を楽しませた。11月14日からは、こけら落とし行事として、全国から広陵中、龍ヶ崎中、八戸中、愛知一中、宇都宮商、静岡中、早稲田実業の7チームを招待し、桐生中を加えた8チームによるトーナメント方式での熱戦が、満員の観衆の前で開催された。

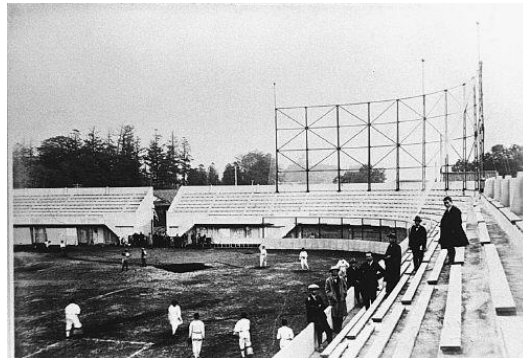
また、新川球場で練習していた桐生中は、昭和5～6年、9～11年の夏の甲子園大会、昭和8年、11年の春の選抜大会出場している。

昭和11年10月に施設所有者である桐生市体育協会堀 祐平氏他6名が、市へ寄付の申し入れにより、昭和12年4月から市の所有する施設となる。桐生中をはじめ、市内外の様々なチームにより歴史を刻み続けてきたが、老朽化、桐生球場の完成、再開発事業等の理由から昭和62年10月に開催された新川球場サヨナラマラソン野球大会を最後の行事として、その使命を終える。

現在、新川球場は新川公園として生まれ変わり、桐生市堀マラソン大会の会場や子どもたちの遊び場、市民の憩いの広場となっている。



昭和2年 建設中の新川球場



昭和3年11月 北関東随一の球場として完成



昭和60年頃 新川球場全景

※6 敬道館（後に修道館）野球道場を創設

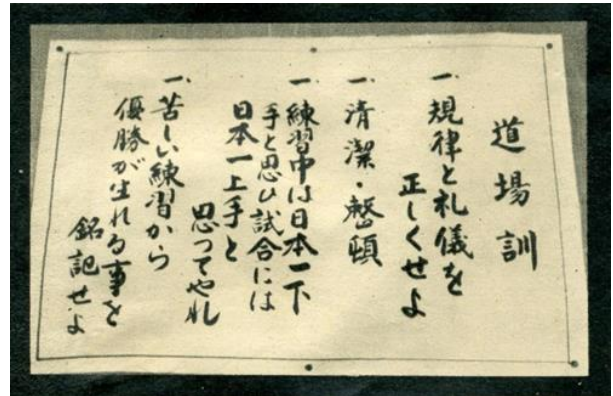
昭和29年、桐生市本町に敬道館（後に修道館）野球道場を創設。

手狭になったため、昭和37年には桐生市浜松町内に2代目の道場が完成する。昭和47年に桐生高校校庭に雨天練習場が建設されるまでの間、この道場で桐高野球部員は日々猛練習を重ねた。

なお、稲川監督の野球に対する情熱が詰まったこの道場から、大学、社会人、プロ野球界へ数多くの優秀な選手が巣立っていった。「球都桐生」の歴史を語る上で、欠かすことのできない存在である。



敬道館入口



敬道館道場訓



屋外のマウンドからピッチング練習
道場内は縦 21m、横 5.5m、165 m²の広さ



ミーティング

※狭い道場の中でも屋外にマウンドを作り、ホームプレートまで正規の距離をとるなど様々な工夫がなされている。



参考文献等

- ・球都桐生の歴史（上下巻）
発行者：桐生市老人クラブ連合会（平成7年3月）
- ・ふるさと桐生のあゆみ
発行者：桐生市教育委員会（平成10年2月）
- ・明日へ伝えたい 桐生の人と心（上下巻）
発行者：桐生市教育委員会（平成16年3月）
- ・市制施行100周年・水道創設90周年記念事業 球都桐生野球史展示会事務局資料